## 2）舞子内湖の魚類調査結果

藤岡康弘・遠藤　誠

【目的】志賀町近江舞子にある内湖（舞子内湖）の魚類棲息状況および魚類の成育状況を検討するため、平成11年６月から１０月にかけて調査を行ったので、その概要を以下にとりまとめた。

【方法】魚類の棲息状況を把握するため、６月１日および１０月２７日の２回にわたり小型の定置網を内湖の南側に広がるヨシ帯の前面（水深約1.5m）に設置し、２日間に捕獲される魚介類の種類と数を調査した。また、魚類の成育状況を把握するため、７月９日に水産試験場で生産したゲンゴロウブナ稚魚（17.66±4.59mm）を21300尾（耳石にALC標識）と７月２８日に漁連から購入したコイ稚魚（73.9±7.70mm）688尾（右腹ヒレ切除標識）を放流し、上記定置網での再捕調査を試みた。

【結果】６月の定置網による調査で捕獲された生物はブルーギル（体長10.7-16.8cm）９尾、オオクチバス（21.9cm）１尾、アメリカザリガニ１個体であった。また、１０月の調査ではブルーギル（3.0-3.9cm）４尾、テナガエビ３個体、アメリカザリガニ２個体であった。７月に放流したゲンゴロウブナとコイ稚魚は捕獲されなかった。

【考察】舞子内湖は面積が7.8haあり、内湖南部にヨシ帯が比較的よく発達している。地元の人の話では、ヨシ帯奥で春季にフナやコイが産卵しているとのことである。６月の調査時にはブルーギルの産卵床とそれを保護している雄が多数観察された。また、釣り人の話では比較的大型のヘラブナが釣れるとのことであり、釣り団体によりヘラブナの放流が行われている。バス釣りの人も多く見受けられた。今回の調査では魚類としては定置網によりブルーギルとオオクチバスしか捕獲されなかった。この２種しか捕獲されないという傾向は琵琶湖の内湖ではほぼ共通したものである。７月に放流したゲンゴロウブナとコイ稚魚が１０月の調査で捕獲できなかったが、ゲンゴロウブナでは放流サイズが小さいことから多くが捕食された可能性があると考えられる。コイ稚魚については、放流数が少なかったことが捕獲できなかった原因かもしれない。現在、水産試験場では内湖等の沿岸帯の魚類相とそこにニゴロブナ稚魚を放流しその再捕状況を調査しているが、舞子内湖に近い条件を備えた守山釣り公園や野田沼などの結果をみると、これらの内湖では外来魚が７０％以上を占めており、ニゴロブナ稚魚の再捕率も他の水域に比較してかなり低い結果となっている。現状でこのような条件の内湖において魚類の増殖を図ろうとすれば、外来魚等からの食害を避けられる大型の種苗（体長10cm以上）の放流を行う必要があると考えられる。

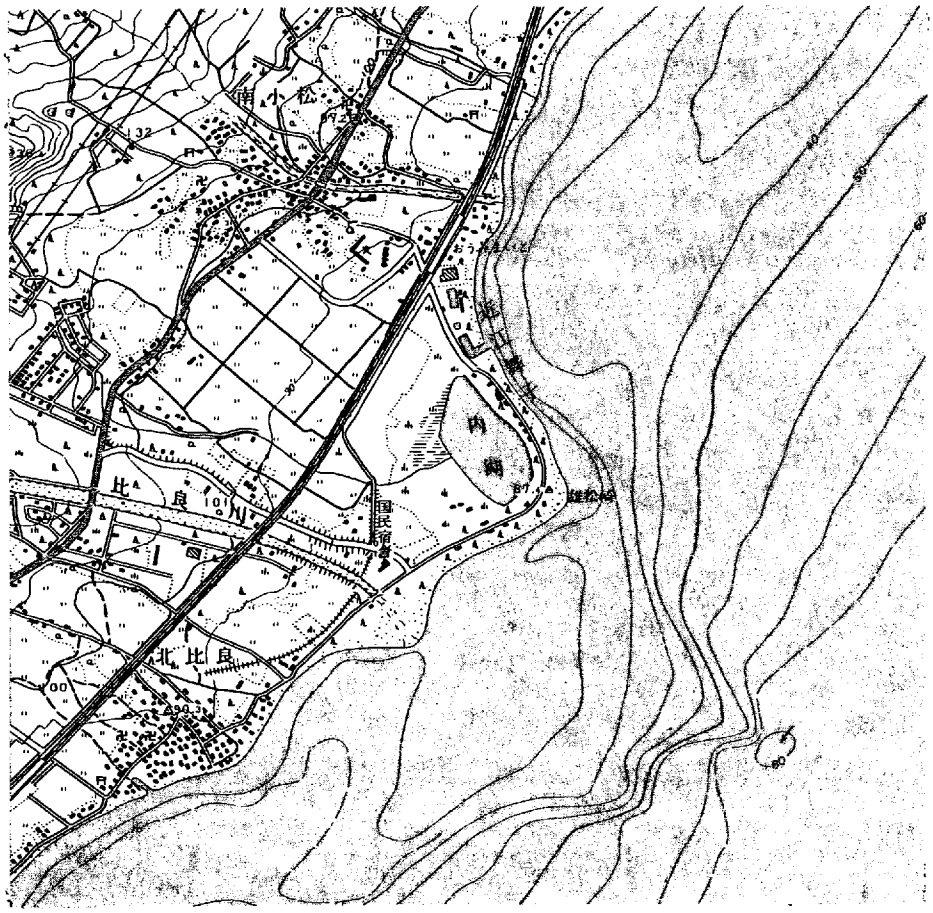


図　1．調査した舞子内湖の位置

表　1　採捕調査で捕獲された生物

| 調査年月日 | 1999年6月3日 | 1999年10月29日 |
|---|---|---|
| 天候 | 曇り | 晴れ |
| 水温 | 24.6℃(13:30) | 16.7℃(10:40) |
| (種類) | (個体数) | (個体数) |
| ブルーギル | 9 | 4 |
| オオクチバス | 1 | 0 |
| アメリカザリガニ | 1 | 2 |
| テナガエビ | 0 | 3 |